

2025年9月1日
生産管理課 小田原

こども神楽について

私の息子（4歳）が通っているこども神楽の伝承教室についてご紹介致します。

そもそも、なかなか接する機会も少ないと思われるこども神楽に何故息子が興味を持ったのかと言うと、息子の通っている保育園で卒業生が神石高原町でこども神楽を習っており、その神楽団がこども神楽を披露してくれるイベントがあり（2歳児の時）、そこで舞う同世代の子供が堂々と舞っている姿と大蛇（ヤマタノオロチ）の迫力に衝撃を覚えたのか自分もしたいと興味を持つようになったのがきっかけになります。



せっかく興味を持ったことをさせてあげたいと思いましたが、なかなか近隣ではこども神楽の道場もないため中国地方で行われるこども神楽のイベントを観覧しながら、神楽の歴史を学びつつ、イベントに出演している団員の方々に道場を教えてもらったり、近隣の市役所に問い合わせを行い昨年やっと岡山県井原市で毎週土曜日の午前中に神楽伝承教室が開催されていることがわかり、現在参加させてもらっています。

この伝承教室では、未就学児から中学生まで20名前後の生徒が毎週木曜日と土曜日に神楽の研鑽に励んでいます。（木曜日は小学生以上）毎年、5月が開校式でそこで入団した子が翌年2月のお披露目会でデビューになります。



ここでの指導は、まず先輩が舞う姿を見ることから始まります。演舞台の前に子供達が座り見るのですが、親は隣で寄り添わずに最後尾で見守ります。一日中見て終わることもありますが、子供なので興味のあることは見て覚えて真似をしたくなります。そうなると、講師の先生が演舞台の後方に誘導し好きなように真似をさせます。そこで、少しづつ基本的な動作を教えて行きます。ある程度出来ると演舞台で舞うことになるのですが、ここでは優しかった講師の方々は一転し、とても厳しく細かい指導になります。私も息子と一緒に真似をして舞ってみることもあるのですが、細かい所作をするとなかなか体幹を使用するため見た目以上にハードです。この伝承教室では、準備・片付け・挨拶・目上の方を敬うこと(言葉遣いなど)や扱う道具の大切さなどについては厳しく指導されます。親としては、こういった指導(躾)を厳しくして頂けることは、子ども神楽を教えて頂けること以上にありがたいことだと感じています。



余談ですが神楽について少し紹介します。(解釈には様々ありますので参考までに)

神楽とは日本の神道で神事の際に神様に奉納する歌舞のことです。神社や祭礼やお祭りの際に見ることができ、その様式は平安時代中期に完成されたとされ、約90種類の神楽歌が存在するとされています。また、神楽の起源は日本最古の書物である古事記・日本書記の『岩隠れの段』という神話からきたとされています。この物語は、『素戔鳴尊(すさのおのみこと)』の傍若無人の振舞いに、心を痛めた『天照大御神(あまてらすおおみかみ)』が天岩戸に閉じこもってしまい、世界から日の光が失われた際に、技芸の女神であった『天錫女命(あめのうずめのみこと)』が岩戸の前で舞を披露し、その賑やかな様子に気を取られた天照大御神を岩戸から誘い出し、世界に日の光を取り戻した。その後、天錫女の子孫でもある巫女の『猿女君(さるめのきみ)』が神がかりの儀式を行う際に、舞を取り入れ、それから巫女による神楽が始まったとされています。



神楽は大きく分けて、宮中での儀式として行われる『御神楽(みかぐら)』と、神社やお祭りなどで行われる『里神楽(さとかぐら)』に分かれ、息子が通っている神楽は、里神楽の中の備中神楽になります。里神楽には、大きく分けて『巫女神楽』『伊勢流神楽』『獅子神楽』『出雲流神楽』に大別され、備中神楽とは、岡山県備中地方で行われている里神楽で出雲流神楽の一つとされています。備中神楽は、元々は荒神様に奉納する形で行われていた荒神神楽から派生したともいわれており備中地方では荒神神楽も盛んに行われています。

備中神楽の演目は様々ありますが、息子は現在、神楽舞の基本の型である『導き舞』を取り組んでいます。

これから秋を迎える季節には備後地方から出雲地方では神楽奉納のイベントが盛んに行われると思います。備中神楽では『導き舞』『(国譲り)大国主命の舞』『(大蛇退治)八岐大蛇』の演目がよく舞われると思いますが、『大国主命の舞』ではよく福の種【お餅やお菓子など】を大国主様(だいこくさま)がまくことがあります。又、『八岐大蛇の舞』では、演じる神楽団に幼児がいれば子蛇(こじゃ)として稀に登場することがあります。ぎこちなくお兄ちゃん達に混じって演じる姿は微笑ましく非常に可愛いです。神楽のイベントを見かける機会があれば『大国主命の舞』と『八岐大蛇』の演目があればお子様は大喜びする演目なのでおすすめです。

